

不定の二人称への言表行為
——ジャン＝リュック・ナンシーにおける言語の問い——

早稲田大学 文学研究科 博士後期課程

表象・メディア論コース

伊藤潤一郎

本論文は、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシー (Jean-Luc Nancy, 1940-) の思考の核心が、不定の二人称への言表行為にあるということを明らかにするものである。

近年ナンシーについての専門的な研究が、英語圏とフランス語圏で徐々に進んできている。英語圏では、多くの入門書と共著論文集が出版されており、全体的な傾向として、グローバル化と「宗教の回帰」という現代世界の状況を背景に、ナンシーの政治論と宗教論を扱うものが多い。フランスでは、これまでに三度ナンシーをめぐる国際シンポジウムが開催されているが、その各回に設定されたテーマ、「意味 (sens)」、「形象 (figure)」、「変異 (mutation)」がフランスにおけるナンシー研究のメルクマールとなっている。

しかし、このような専門的な研究状況の外に一步踏み出せば、日本語圏であろうと他の言語圏であろうと、ナンシーの哲学＝共同体論という受容のされ方が最も一般的なものだろう。周知のように、こうした受容を決定づけたのは一九八三年の論文「無為の共同体」と、モーリス・ブランショがナンシーへの応答として発表した『明かしえぬ共同体』である。一九八三年のこの二つの共同体論が現代思想における共同体論の端緒となり、ナンシーとブランショの共通の着想源であるジョルジュ・バタイユの共同体論の再評価が進み、それと同時にジョルジュ・アガンベン『到来する共同体』やロベルト・エスポジト『コムニタス』、アルフォンソ・リングス『何も共有していない者たちの共同体』などが発表され、共同体論は現代哲学の重要トピックのひとつと見なされるまでになっている。しかし、共同体論を中心にナンシーを理解すると、「無為の共同体」以前のナンシーの思考が見落とされがちになる。ナンシーがはじめて公に論文を発表するのは一九六三年であり、実に「無為の共同体」の二十年前のことである。共同体論を中心にナンシーを捉えると、この二十年間の思想の変遷へと視線が向くことが少なくなり、一九八〇年代の共同体論が、一九六〇年代以来ナンシー自身によって練り上げられてきた独自の問題系から現れたものだという点が見逃され

てしまう恐れがある。それゆえ、本論文では一九六〇年代の初期の思想を第一章で、共同体論へと至る一九七〇年代の主体論を第二章で扱い、共同体論以前のナンシーの思考に関する議論に紙幅を割き、ナンシー固有の思考の核がどこにあるのかを明らかにすることを試みる。とはいえ、共同体論はナンシーの思考の到達点というわけでもない。ナンシー自身は共同体論の練り上げと軌を一にして、一九八〇年代後半から「意味＝方向＝感覚 (sens)」という多義的な概念を積極的に打ち出すことによってさらなる思考を展開し、一九九〇年代に入るとこの概念を起点として世界論や身体論、イメージ論、「キリスト教の脱構築」など、幅広いトピックが論じられるようになる。この「意味」という概念こそ、ナンシーの思考のひとつの到達点であり、身体論やイメージ論など後の様々なテーマもこの概念に沿って論じられたものだと見なすことができる。本論文はこのような立場に立って、第三章から第四章にかけて共同体論から「意味」という概念に至るナンシーの思考の生成過程を追うことにする。

一方で以上のような初期から一九九〇年代の「意味」概念に至る思想形成を辿りつつも、他方で本論文はナンシーの思考の核を捉える枠組みを提示することを試みる。これは、ナンシーのうちに見られるふたつの人称性、すなわち「誰か (quelqu'un)」という不定の人称と「あなた、君 (vous, tu)」という二人称を統合的に解釈するための枠組みである。ナンシーは一九七〇年代に主体の脱構築とでも言うべき仕事に取り組み、カント哲学やドイツ・ロマン主義、デカルトとの格闘をとおして、言表行為において主体が「誰か」という不定の人称と切り離しえないことを示している。一九九三年の『世界の意味』においても「誰か」と題された一章が設けられていることからわかるように、不定の人称はナンシーに一貫するトピックのひとつだと言えよう。それに対し、一九八〇年代の共同体論においては二人称にまつわる印象的なテーゼが打ち出されている。一九八二年の『声の分有』では、「他なるものから他なるものへの、君から私への、私たちから私たちへの無限に有限な分有」と述べられ、また翌年の論文「無為の共同体」は、「君が私を分有する」という端的な定式を提示している。どちらもナンシーの共同体論の鍵概念である「分有 (partage)」に関連づけられており、共同体論の練り上げとともに二人称の問題はナンシーの思考にとって欠くことのできないトピックとなっていく。このように一方で「誰か」という不定の人称、他方で「あなた、君」という二人称が論じられ、ナンシーにおいて人称の問題はこれら二つの方向に引き裂かれているようにも見える。

従来の研究において、これらふたつの人称を統合的に解釈しえたものはない。そもそもナンシーにおける不定の人称に正面から取り組んだ研究がまだないのだが、その理由として不定の人称と非人称がしばしば混同され、ナンシーのうちに非人称が読み込まれがちで

あることが挙げられる。しかし実際には、ナンシーのコーパスを見渡しても、ほとんど「非人称的 (impersonnel)」といった語は登場しない。それにもかかわらず、非人称の問いがナンシーのうちにあるかのように語られるのは、ナンシーが自らの共同体概念に「無為の (désœuvré)」というブランショ由来の形容詞を付したことによるところが大きいと考えられる。こうした研究は、非人称的な「彼」の彷徨という人口に膾炙したブランショ像からナンシーを理解してしまっていると言えよう。これに対し、二人称を重視する研究は、二人称を一人称に現前する他者と理解し、対面関係をナンシーの共同体論のモデルと見なしてしまうことが多い。もちろん、ナンシーの共同体論は対面関係をも含む議論を展開しているのだが、彼の語る二人称は対面関係にのみ限定されるわけではないことに注意する必要がある。ナンシーの語る二人称は現前する他者に限定されるものでは決してなく、対面関係に二人称を限定すると、なぜ「誰か」という不定の人称が同時に強調されているかが理解できなくなってしまう。

それゆえ、不定の人称と二人称に分裂したナンシー像を統合するような読解格子が見出されなければならない。本論文がそのために提示するのが、不定の二人称という考え方である。不定の二人称とは「あなた」と名指される対象が限定されていない事態を指している。言い換えれば不定の二人称とは、誰でもよいという不定性と「あなた」という二人称性が結びついた、誰でもよいあなたである。「誰か」という不定の人称と、「あなた」という二人称をともに論じるナンシーの思考の核心には、こうした誰でもよいあなたという不定の二人称の問いが秘められており、これこそが彼の思考を整合的に読み解く鍵なのである。このような読解格子にもとづく本論文は、具体的には以下の四章から構成される。

まず第一章では、ナンシーの最初期の思想を扱う。ナンシーが最初の論文「ある沈黙」を公にしたのは一九六三年であり、発表された媒体はキリスト教左派運動・人格主義の雑誌『エスプリ』だった。若きナンシーが人格主義にコミットしていたことは、本人の回顧談などによって知られているが、その内実についてはこれまで精査されてこなかった。そこで第一章では、最初期のナンシーが人格主義の伝統に属しつつ、それを言語の観点から刷新することを企てる哲学者として思想の舞台に登場したことを、エマニュエル・ムーニエからジャン＝マリ・ドムナックに至る人格主義運動の変遷をも視野に入れながら詳らかにする。しかし、「ある沈黙」の三年後のアルチュセール論「マルクスと哲学」において、はやくもナンシーは人格主義を根本的に批判する視座を打ち出すようになる。アルチュセールの科学概念への批判をとおしてナンシーが提示するのは、差異を根源的なものと見る思考であり、これをもとに人格主義の目的論に対して明確に批判的な態度が取られるようになる。そして、さらに三年後のデリダ論「注釈」においては、「マルクスと哲学」での根源的な差異について

での思考がデリダの「差延」と接続され、最終的には、あらゆる実体的な起源を排する「書き込み」の思考が提示されるに至る。ナンシーがデリダと出会った際の思考の上での争点は、起源によって統制されることのないアナーキーな「書き込み」だったのである。このように第一章では、ナンシーが人格主義から出発しながらも、そこから離れ一九六〇年代末にデリダの脱構築思想に接近していくまでの過程を辿る。

つづく第二章では、一九七〇年代の主体論を取り上げる。この時期のナンシーはフィリップ・ラクー＝ラバルトとの共同作業を精力的に進めつつ、ヘーゲル、カント、ドイツ・ロマン主義、デカルトなど思想史上の偉人たちの読解の成果を発表し、そのうちのいくつかは近代的・形而上学的な主体概念を脱構築する仕事だった。ここではそのなかから、一九七九年のデカルト論『エゴ・スム』を取り上げる。ナンシーによれば、デカルトの「私はある、私は存在する」という命題を、主体を確立せんとする言表行為として捉えるならば、それは主体が開始されると同時に瓦解するポイントであり、主体が脱底＝異質化の運動をとおして、「誰か (quelqu'un)」という不定の人称の空間へと開かれていることを示している。このようにして、一九七〇年代の主体論において、言表行為と不定の人称というトピックが現れてくる。第二章ではこの次第を、ヴァレリー、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、デリダらのデカルト論も参照し、思想史的な背景を踏まえつつ明らかにする。

さらに第三章では、ナンシーの代名詞ともなっている共同体論を扱う。ナンシーが共同体について本格的に論じ始めるのは一九八二年の『声の分有』からだが、ここではじめて「特異性 (singularité)」という概念が、一九七〇年代から連続する言表行為の問いと関連して登場する。また先述の二人称についてのテーゼが『声の分有』と翌年の論文「無為の共同体」の双方で提示され、それと同時に「分有」という語がその多義性を最大限に活かして用いられるようにもなる。第三章では、まずはこれらの概念の整理を試み、一方で「特異性」については、(1) 個的単独者、(2) 言表行為の一回性、(3) 意味の他化、という三つに分類が可能であることを示す。他方で「分有」については、(1) 根源的な同一性の「分割」、(2) 意味形成と意味の他化の二重運動である「部分化」、(3) 他化の運動の「分かち合い」、(4) 「～から～への出立」、という四つの意味に分けられることを明示する。こうした概念の整理にもとづいて、共同体論において不定の二人称への呼びかけというモチーフが浮かび上がってくることを明らかにするとともに、一九八〇年代のナンシーが存在論へと傾斜していき、それが一九九〇年代以降の世界論へとつながっていくことも確認する。しかし、一九八六年に出版された単行本版『無為の共同体』に収められている「文学的共産主義」に見られるように、言語の問いが存在の問いへとそのまま移されてしまうことで、言語論と存在論のあいだが整合的に架橋されず、両者は分裂を来すようになる。第三章の最後では、言表行為論

から存在論への重心の移動によって、ナンシーの議論が言表行為の言語論と世界の自己変容を語る存在論へと分裂することを明らかにする。

最終章となる第四章では、ナンシーの思考の到達点であり、一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけて練り上げられる「意味(sens)」という概念の内実を、「意味作用(signification)」、「真理(vérité)」という概念との関係から描き出す。ナンシーにおいて「意味作用」とは、シニフィアンとシニフィエの二項対立を基礎とする閉じたシステムであり、「真理」とは同定と類似の二重化である。それに対し「～に向かってあること(l'être-à)」と規定される「意味」とは、不定の二人称への差し向けにほかならない。さらに、ナンシー自身の言語的な差し向けのあり方を問うために、「古名の戦略(stratégie de la paléonymie)」という観点からナンシーの語彙選択を分析し、「特異性」や「共同体」という語が人格主義の中心語彙と重なっていることを確認する。つまり、ナンシーはその意味を変容させつつも、人格主義が用いるのと同じ語彙を選択しているのである。最後に、デリダによるナンシーへの批判を参照することで、近年のナンシーが自己脱構築の存在論から言表行為の理論へと再び重心を移していることを追う。デリダは「共同体」や「兄弟愛」といったナンシーの語彙選択を繰り返し批判しているが、それだけでなくナンシーによる「キリスト教の脱構築」というプロジェクトにも批判的な眼差しを向けている。デリダの眼には、キリスト教の自己脱構築を語るナンシーの議論は、キリスト教の強化にしか映らなかった。このようなデリダの批判を受けて、ナンシーは『アドラシオン』などの近年の著作で、ふたたび言表行為の理論を練り上げ直している。この言表行為の理論の核にあるのが、不定の二人称への呼びかけであり、第四章ではそれがパウル・ツェランの「投壘通信(Flaschenpost)」というモチーフになぞらえることができるような言語の働きであることを示す。

このようにして本論文は、ナンシーの思考の核心に不定の二人称への言表行為があることを明らかにするが、以上の議論からまず帰結するのは、不定の二人称への言表を行う「主体」の問いだろう。ナンシーは一九八九年に『コンフロンタシオン』誌の「主体の後に誰が来るのか」という特集号の巻頭言で、「実際のところ、誰が思考するというのか、共同体でないとしたら」という言葉を記していた。これはそのまま読めば、思考する主体の座を共同体が占めるということの意味しているように思えるが、実のところこの一文が述べようとしているのは、私たちは共同的にしか思考しえないということなのである。ナンシーにとって思考とは、概念的な同一性や主体の権能などあらゆる閉域の囲いを超出することであり、こうした外部への運動こそ不定の二人称へ向かってなされる言表によって現れる。そして、誰でもよいあなたへと言葉を差し向けることこそナンシーの言わんとする共同体である以上、思考することはやはり共同でしかありえないのである。それゆえ、思考する主体とは、

誰でもよいあなたへと言葉を投げる者だということになるだろう。たしかに、ナンシー自身は「主体」という語に対して慎重な姿勢を示してはいる。しかし、講演「マッド・デリダ」で、ナンシーは次のように述べている。「デリダにおけるあらゆる対話に注意を払い、「私」が差し向けられる（発送され、付託され、委ねられ、譲渡される）あらゆる「君」ないし「あなた」に注意を払う必要があるだろう」。これと同じことは、ナンシーに対してもあてはまる。つまり、ナンシーは主体を排斥したことなど一度もなく、ただ、主体という名の選択に慎重であっただけなのである。それゆえ、「君」や「あなた」へと送り出される「私」については、それを語る際に「主体」という語を避けるとしても、なお語らなければならない。ナンシーに即して言えば、不定の二人称への言表行為の「主体」について語らなければならないということだ。問題は、そのような「私」をいかに語るか、いかなる語によって語るかである。第四章で不定の二人称への言表行為をツェランの「投壘通信」というモチーフによって敷衍したことに倣えば、ナンシーにおける「主体」とは、言葉の入った壘を誰でもよいあなたへ向けて海に投じる投げ手、投手だと言えるだろう。「主体」という語を避ける必要があるならば、私たちはそれを「投壘通信」の投げ手と言おう。私たちはそれと知らずにこのような誰でもよいあなたへと向けて「投壘通信」としての言葉を投げており、それがどこかのあなたに漂着したとき、投げ手の意図を越えて意味は変容する。一義性をもちえないこうした意味の開けにおいてのみ、私たちは共同体を形成するのであり、ナンシーが語る共同体とは、実のところ「投壘通信」の共同体にほかならない。

また、このような不定の二人称への「投壘通信」には、ナンシーの人間主義が明確に表れている。先にも述べたように、ナンシーは非人称を語ることがほとんどなく、人称性を保持した思考を必ず展開している。もちろんそれは、誰でもよいという不定性をもった人称性なのだが、誰でもよいあなたという形で、不定といえども人称性は保たれている。ナンシーの思考が向かっているのは、この一見対立するようにも思える不定性と人称性の狭間であり、非人称をかすめるところで人称性を捨てないところにナンシーの人間主義の争点があると言えよう。そうであれば、人間主義を選び取るというナンシーの決断はいかなる価値をもっているのだろうか。端的に言えば、ナンシーの人間主義が掬い上げているものとは、人間の欲望だと言えるだろう。ツェランは、「投壘通信」という形象を用いて、ホロコーストという出来事の後で、いまだなお誰かへと言葉が届くはずだという「信」を表明している。人間はどのような状況にあっても、言葉が誰かに届いてほしいという欲望を捨てることができない。誰でもよいけれどもあなたへと届いてほしい。ナンシーの不定の二人称は、言葉を発する人間のこうした欲望を捉えており、ここに人称性にこだわるナンシーの人間主義の価値がある。